

平成31年3月26日(火)

老球の細道471号

暴言より理論、激励で！

会津バスケットボール協会 室井 富仁

日本バスケットボール協会(JBA)は新たなメッセージとして、「クリーンバスケット、クリーン・ザ・ゲーム」を発信し、喫緊の課題として試合中のコーチの「暴力暴言根絶」に取り組む方針を発表した。大会会場にバナーを掲出し、啓発活動を実施したり、大会プログラムにメッセージを掲載し、啓発活動を実施するという。その中でも今後注目されるのは下記のような規則が加わることである。

①コーチの暴力的行為および暴言といった振る舞いに対しては、「リスペクト・フォー・ザ・ゲーム」の観点からテクニカルファウルとする。

②コーチがテクニカルファウル(C)を2個宣せられた場合、失格退場とする。

③失格退場となった場合、現段階では規律案件とはせず、次試合の出場停止処分等は科さない。

2014年11月から2018年11月まで日本スポーツ協会に寄せられた暴力、暴言の相談は315件あったが、うち60件がバスケットボール関係で全競技を通してNO1という不名誉な結果を得た。そして驚くべきことに大半がミニバスケットボール関係だという。また、2014年以降、全国高体連が認定した体罰においてもバスケットボールが最も多かった(朝日新聞から)。

なぜバスケットボール指導者が多いのかというと、決して情熱ある熱血コーチが多いからというわけではなく、コートが狭く、選手との距離が近いために、指導者が選手やプレイに関与する割合が大きいのが原因と見られているようだ。

今のご時世、いくら選手を思って指導し、情熱的に指導しても「暴言、暴力」は絶対アウトである。ボランティアであろうがプロフェッショナルであろうがこの件に関しては区別はない。私も先日講習会の最中に思わず「バカ！」という言葉が出てしまった。長年の悪習慣はなかなか消えなくてやっかいである。ただ激怒の末に出た「バカ！」ではなく、笑顔から出た「バカ！」なので「ま、いいか」などと自分で納得していたが、実際試合中にこのような状態になったら、審判はどのように判断するのだろうか。

JBAのガイドラインによると、コーチのプレーヤーに対する暴言は①人格、人権、存在を否定する言葉(具体例) 最低、クズ、きもい、邪魔、出ていけ、帰れ、死ね、てめえ、この野郎、貴様 ②自尊心を傷つける、能力を否定する言葉(具体例) 役立たず、下手くそ、アホ、バカ ③身体的特徴をけなす言葉(具体例) チビ、デブ ④恐怖感を与える言葉(具体例) 殴るぞ、しばくぞ、ぶっとばすぞ、帰りたいの？、試合出たくないの？などがあげられている。私にとって身に覚えのある言葉が並んでいる。今ベンチでコーチをしていたら何回退場していたかわからない。

厳格な審判とおおらかな審判とで、テクニカルファウルと判断される基準に不公平が起きないかちょっと心配である。新年度からこのルールが適用されることで審判、コーチに大きな混乱が起こりえることは予測できるが、基準を明確にして毅然とした判定ができるようしっかり準備してほしい。コーチは暴言でなく、右手に理屈と理論、左手に情熱でひるまず選手指導にあたってほしい。進化には変化がつきものである。